掲載日:2026年05月26日，面名:くらし，記事ID:KIJ20260526_01018000101002002
(C)宮崎日日新聞社

京都大防災研究所宮崎観測所
移転記念講演会

防災に多角的視点重要

京都大防災研究所宮崎観測所が、一部機能を残して宮崎市の宮崎公立大に移転したことを記念した講演会は15日、同大学であった。同大学の四方由美副学長が「多様性から考える防災」、京都大防災研究所の水谷歩助教が「津波防災と津波の科学」と題して講演。防災に多角的な視点を取り入れる重要性や津波発生のメカニズムについて考えた。要旨を紹介する。

（金井佑介）

知見生かし計画作りを

多様性から考える防災

宮崎公立大
四方由美副学長

防災には女性の視点が足りていないと言われるが、圧倒的に避難所についての指摘が多い。例えばプライバシーや男女の役割分担の問題は、災害時により際立つ。炊き出しや子ども、高齢者のケアといった「無償労働」は女性に偏る傾向があるほか、災害時はドメスティックバイオレンス（DV）も増えるとのデータも。生理用品の配布などに関しては「スフィア基準」（国際的な人道支援の最低基準）を満たしていないとの指摘もされている。

セクシュアルマイノリティーの方や障害者はもちろん、男性にとっても災害時はさまざまな困難が発生する。例えば（災害関連）自殺者の割合は女性の2倍近くあり、失業男性の飲酒率、アルコール依存も問題になっている。男性も性被害に遭うことがあるが、被害を言い出せないことが多い。「弱音を吐きにくい」「支援を求めにくい」という男性規範が前提にあるためで、これらにも配慮する必要がある。

一人一人の困難を知ることが全ての人の安全につながるという意味で、防災には多様性の視点が必要だ。

災害時は誰が支援を提供し、誰が支援を受ける側になるか分からない。防災について多様な当事者が計画段階から参画することでいろいろなニーズが見えてくる。それぞれの知見を生かして計画を作り、活動していくことで地域防災の底上げや、災害時のレジリエンス（回復力）構築につながっていく。

到達時間を想定し訓練

津波防災と津波の科学

京都大防災研究所
水谷　歩助教

地震による津波は、海底で起きた地殻変動が海面を動かし、海面の波が周りに伝わることで発生する。規模が大きく、震源が浅い地震は基本的に大きな津波を起こしやすい。海面変動が起きれば津波は発生するので、火山噴火による山体崩壊や気圧波も要因になる。

世界最大の津波は地滑りにより発生した、米アラスカ州のリツヤ湾津波（1958年）で、津波の高さは524㍍と記録されている。

津波の速さは沖ではジェット機並み（時速800㌔）といわれ、岸に近づくにつれて自動車（同36㌔）くらいまで速度を落とし、波を高くしながら到来する。津波の最初の到達時刻は、発生した場所の情報や水深が分かればだいたいは計算することができる。津波は当たり前のことだが、注意報や警報が出てからすぐ到来するわけではなく、それなりの時間をかけて伝わってくる。

皆さんが住んでいる地域で南海トラフ巨大地震といった大規模地震が発生した場合に、どのくらいの時間で津波が来るのか、どれくらい余裕を持って逃げられるのかを考えながら避難訓練をした方がいい。

地震による津波の研究は進んでいて警報や注意報、ハザードマップのような仕組みは関係者から自信を持って皆さんに出されている。一方で津波の減衰や地震以外に起因した津波に関しては研究が進んでいない部分もあり、そのためにも火山や地滑り分野の研究がさらに重要となってくる。